文化

坂口安吾の「ふるさと」

矢田津世子への恋情にも似て

山﨑　義光

やまざき・よしみつ　1969年北海道千歳市生まれ。秋田大学教育文化学部准教授。博士（文学）。主な著作に「島木健作の「地方」表象（共著『一九四〇年代の〈東北〉表象』）、「月給取りの視点から見た大阪」水上瀧太郎『目曜』『大阪』『大阪の宿』」（共編著『横光利一と関西文化圏』）。

あきた文学資料館にて開催中の企画展「秋田を訪れた文人たち」では、坂口安吾が矢田津世子に宛てた書簡20通を展示している。息づかいの感じられる筆跡を間近に見て読むことができる。安吾にとって津世子への恋情はその後の作品に深く影を落とした。

安吾は1931年に「木枯の酒倉から」「風博士」などファルス（滑稽劇）風の諸作でデビュー。翌年「FARCEに就て」で自身の文学観を表明した。「ファルスとは、人間の全てを、全的に、一つ残さず肯定しようとするものである。凡そ人間の現実に関する限りは、空想であれ、夢であれ、死であれ、怒りであれ、矛盾であれ、トンチンカンであれ、ムニャムニャであれ、何から何まで肯定しようとするものである」

太平洋戦争開戦前後には「文学のふるさと」「日本文化私観」を発表。時の国策や世論に染まらない人間観と文化観を述べた。それは戦後の「堕落論」に通じる。人々が囚われている物事の価値観から「堕ちよ」と言い、それでも生きる人間の可能性に賭けて「生きよ」と言った。

同じころ、津世子を回想した「二十七歳」「三十歳」を発表。出会いは1932年で、翌年関係を深めた。「二十七歳」では結婚を望んだ双方の母に言及し、津世子の母についてこう記した。「私があなたの家で御馳走になり酔っ払うのを目を細くして喜んでいるお母さんであった。際限もなく私に話しかけるお母さん。けれども、その言葉は、あなたの通訳なしには、私には殆ど分らなかった。ひどい秋田弁なのだから」

書簡には親密で甘い言葉は見当たらない。同志・友人として以上に近寄れないもどかしさが紙背にある。「三十歳」は1935年から翌年にかけて関係が再燃し訣別するまでの回想である。36年3月16日付書簡には「手紙はやっぱりいけない。会って下さい。僕は色々話さなければならないやうな気がします」と書いた。

坂口　安吾　1906～55年

新潟市生まれ。小説「白痴」や評論「堕落論」により、太宰治や織田作之助と並んで無頼派と呼ばれる。作品に、津世子との恋愛体験を元にした「吹雪物語」、「青鬼の褌を洗う女」「肝臓先生」など。

矢田　津世子　1907～44年

五城目町生まれ。小学生時代に東京に転居。坂口安吾、田村泰次郎らと同人誌「桜」に参加。雑誌「人民文庫」に発表の「神楽坂」は第3回芥川賞候補。同町の五城館に矢田津世子文学記念室がある。

新潟市の海辺の松林にある安吾の記念碑（右奥）。碑文は「ふるさとは語ることなし」（筆者撮影）

が、長編小説『吹雪物語』を執筆し始めたころの6月16日付書簡で「僕の存在を、今僕の書いてゐる仕事の中にだけ見て下さい。僕の肉体は貴方の前ではもう殺そうと思ってゐます」と訣別の言葉を送った。

戦後の安吾は『安吾巷談』をはじめ、事件・風土・歴史と世相をからめた批評的エッセイを精力的に書いた。その一つが『安吾新日本地理』で、なかに「秋田犬訪問記」がある。秋田駅前の「暗さや侘しさ」が自分の育った新潟の町と似ているとし「わずかばかりの美しさも、わずかばかりの爽やかさも、私の眼には映らない」とにべもない。「けれども私は秋田を悪く云うことができないのです。なぜなら、むかし私が好きだった一人の婦人が、ここで生れた人だったから。秋田市ではなく、横手市だ」とも記す。

そして記者に「秋田はいい町だよ。美しいや」と「ウソをついて」やる。津世子の出身地を勘違いし、正直にウソも記すが、ファルス以来講談の味を加えた安吾のスタイルには対象への愛がある。「ホンモノの秋田犬」についても、案内してくれた秋田犬保存会長を「愛犬家の最高のタイプ」という一方、「どうしても、コリーやシェパードよりも好きにはなれない」自分の「性分だけはハッキリ申し上げておかざるを得ません」という。

新潟市の海辺、松林のなかに記念碑がある。碑文は「ふるさとは語ることなし」。安吾が学校をさぼって一人海を見つめた場所だ。「私のふるさとの家は空と、海と、砂と、松林であった。そして吹く風であり、風の音であった」（「石の思い」）。虚しく切ない風景である。

「文学のふるさと」というふるさとは、人間そのものの本来的な「孤独」を指す。他人とのあいだに共通理解を欠き突き放された場所こそが人間のふるさとである。ただし、それはゆりかごではあっても、大人の仕事は帰ることではないともいう。人は郷愁から自由になれないが帰ることもできない。海辺で烈風をうけ傾く松に安吾の文学をみる。

安吾の書簡展示　あきた文学資料館

あきた文学資料館（秋田市中通）の企画展「秋田を訪れた文人たち」は、五城目町教育委員会が所蔵する安吾から津世子宛ての書簡を全て展示している。最終日の12月2日午後1時半から同資料館で、秋田大准教授の山﨑義光さんが「坂口安吾―矢田津世子との出会いから『秋田犬訪問記』まで」と題して講演する。入場無料。聴講希望者は同館☎018・884・7760へ申し込む。

奈良当麻寺・国宝西塔

鳥期の舎利容器発見

古級、来年2月から展示

城市の当麻寺にある国宝西塔から見た、飛鳥時代後期のものとみられる入の舎利容器＝奈良市の奈良国立博物館